

話題 6 5 ティータイム (4) 「老衰万歳」

祖母は、やんばるの自宅で看取った。畳の上で。毎週の土曜日、勤務する那覇市内の病院で点滴を処方し、持参して少ない食事を補った。草木が自然に枯れるがごとく、「寿命」という糸が途切れるのを目の当たりにした。穏やかに息を引き取った。十分なような気がした。この世での苦勞は。

母親は、近くの老健施設で看取った。親父は、私が3歳、妹が生まれて半年で、職務上の怪我で亡くなった。女手一つで、残された5人の子供を育てた。穏やかな晩年であった。100年の苦勞は、表情には無かった。「ス・・・と」、宇宙にとけ込むかのように息を引き取った。「この世の苦勞は、大したことはなかった」と言いたげに。

3年前にギヤ・チェンジをした。急ブレーキを踏んで。「がん」の診療から「老年医学」への挑戦であった。老健施設は病院ではなく、介護・リハビリの施設である。しかし、100人のお年寄りの方々の生活の場においては、毎日、何かが起こる。「老衰」もあれば、「突然死」もある。

日常の診療、特に「がん」の診療は積み上げられてきた事実、根拠に裏打ちされた医学、医療の応用である。気がついたことは、数多くの人生の物語を背負った方々への「老年医学」は、根拠以上に、個々の人生の物語に照らし合わせた医療の展開となる。

「看取り」という用語には、日本人の、ウチナーンチュの、独特の意味合いが含まれている。「看取る」側の思いが強調され、残される者のための「看取り」になる。もしかすると、「看取り」ではなく、次のステップへの「見送り」と捉える文化の創造が、真の解放、この世の苦勞からの解放につながるのではないかと考えるこのごろである。